

菅江真澄翁と温泉（その三）

秋田県衛生科学研究所

児 玉 栄 一 郎

湯の平（仙北郡）

菅江真澄翁の「月の出羽路（仙北郡五）」は翁が73歳（1826年）のときに著わされた紀行であるが、その中に現在神岡町の東南方に聳える神宮寺嶽その他について誌しているのであるが、「此神宮寺の嵩に属し（つづき）つらなる山々多し、そがあらましを挙げて此処に云む」とのべて次のような項が書かれている。

○遙（よう）の森 ○神嶽（神宮寺嶽）、此山蔭には ○紙ヶ沢 ○蟹沢 ○殿内山 ○湯の平（ひら）、むかし温泉ありしといひ、今此比良に
よき寒泉涌ぬ ○笹の倉 ○鳥帽子山 ○獅子鼻
○腹（やせ）長根 ○鉤栗（おな）坂 ○姫神ノ
嶽 ○牛の首 ○荒平 ○三森山 ○こもつぐえ

そしてその続きに三寒泉、すなわち温泉比良清水、花小屋寒水、猪比良妙美井をあげて、「名だたる寒泉なれば此三泉を此処に挙る也」と結んでいる。

このことについては、すでに前報にのべたとおりであるが、調査未完のままであつたので、杜撰の誹を免がれない。その後になつて有名な三泉のうちの一つが判明したので、改めて此処に報告したいと思う。神宮寺嶽または姫神山の西方で、神宮寺の町から南外村へ通ずる県道を雄物川に架かる瀧見橋を渡り終えて西行、間もない所に直木という部落がある。境界から南外村にはいつて間もない県道の東に三軒ばかりの農家があり、その最も奥の家屋が鈴木某氏の住宅である。この鈴木家の談るところによると、年代は不明であるが、寒泉を発見した者は先祖の鈴木三左衛門氏であつたという。この鈴木氏宅から東南に延る山（クサビラ）の山

裾沿いに 100 米ばかり東北に進むと断崖であつて、その麓からかなりの勢いで寒泉が湧出している。みると二米から五米の間隔で三つの湧出口があり、粘板岩の裂れ目から噴出している。そしてそれらの中間には水神を礼る小祠がある。湧出口から出た水はやがて一川となり落ちて行くのであるが、水質は透明、臭気はなく、附近には水硫黄も見当らない。手に冷たく、検温すると摂氏 10 度（気温 26 度）であつた。鈴木氏によると此清水は飲料水とする他灌漑用に使用しており清泉を湧かす山丘はクサビラといい、清泉の湧く場所をムジナピラというと語る。つまりこの泉は真澄翁の挙げた三泉のうちの一つ、猪比良妙美井に該当するものである。然らば湯の平は何処か、鈴木氏にも不明であるという。

湯の沢の温泉

真澄翁の「雪の出羽路」（雄勝郡二）は文化 12 年（1815 年）、翁が 62 歳のときの著書というが、その中で生保内（おほない）の語原について次のように述べている。「元と蝦夷辞の小沢（ボンナイ）の多くそのさまざまに訛り、またボンナイに大字添ておほほむなるを、文字をもそれぞれ書きなしたるならんが、仙北郡にも生保内あり、河向郷木横場半（なから）地一ツより東を此村と云ふ也。」

語原考はさて置き、その次に生保内（生内とも書く）に特記すべき事項として次のものを掲げている。

一館野沢、湯の沢（いでゆある也）、おちが沢

犀川、大滝ノ明神、不動明王堂、虚空蔵菩薩堂、
（洪鍾に明和〔1764—1772〕・年と彫た
り。）、山神などを数えあげて、最後に

「むかしよりいと広き村にや、郡邑記に享保の
ころは七十二戸あり。檜山台越えの山路あり、中
野の眺望いとよし。」と結んでいる。

この生保内に到るには皆瀬村菅生で、菅生橋を
渡らずに皆瀬川の北岸を東方に進むか、あるいは
近来完成をみた皆瀬ダムの堰堤を通ることである。
途中長石田の山神社（菅葺き）を左手の山麓に見
て木積場に至る頃には皆瀬発電所の人造湖が眼下
に見えてくる。水色碧緑、入江は深く、岬があり、
島があり、茂る雑木が美しい。道が下生保内に達
する頃には新しく開発された道路は高く山腹を
縫い、遙か下に旧村道が見える。僅かばかりの田
や畑、また中ノ台や鍛木に通う路もあるが、嘗て
は真澄がこの道を通つたことを偲ぶと急に峠がは
かないものにみえた。やがて下生保内となると道
端に佇びしい鹿島の石神を祭る。上生保内が近ず
くとやはり路傍に三尺ばかりの不動明王の石像を
祀る。また上生保内の東岡には秋葉神社を祭るが
手入れが行き届き清浄の趣きがあり、祭礼は7月
24日のようである。その他山神の社も立派であ
るが、上生保内の北端れ、犀川を隔てて二三人家
のある処から椿台へ越す道が見える。しかしこの
道は真澄翁の記された檜山台越えの道であろう。

この道は大川目山と高戸屋山とがなす尾根、つ
まり生保内を越えると東成瀬の菅台またはその南

の檜山台に至るものであろう。ただしこの道を真
澄翁が進まれたかどうか不明であるが、東に見え
る限りの山々はかなり急峻である。上生保内から
北へ更に1キロばかり進むと岐路に立つ。右手の
橋を渡れば椿台方面へ向う新道で、左に折れると
湯の沢部落であるが、再び此処に不動明王像が立
ち、また八坂の神の宮居がある。この岐路の手前
で道路の西側に泥岸が頁岩状となつて斜めに走る
層があるのであるが、湯の沢の湯は道路の傍で、
泥岩層の麓であると村人に教わる。昔は此処に温
湯も湧き、湯花も見られたが、それは古老の語り
草であつて現在では昔の姿がないという。しかし
崩れた岩塊から絶え間なく出る水が見られるし、
その湧水が道路に川をなして流れている。

しかし温度もなく、臭気もなく、また湯花らし
いものも見られなかつた。三年前土地の人が此処
近くにボーリングを行つたが温湯は湧出を見なかつ
た由である。

泉質不明（昭45）

以上で真澄翁の著書中に見られる温泉の全部に
ついて調査したつもりであるが遺漏なしとしない。

それらについては今後も調査する予定であるが、
今後とも諸賢の御指導を期待する次第である。